

大学生の服装が景観や授業態度に与える影響 に関する研究 —筑波大学の事例—

谷口綾子¹・川村竜之介²・赤澤邦夫²・岡本ゆきえ²・桐山弘有助²・佐藤桃²

¹正会員 筑波大学大学院システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail: taniguchi@risk.tsukuba.ac.jp

²非会員 筑波大学大学院システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail: s1220609@u.tsukuba.ac.jp

本研究では、運動着(ジャージ・スウェット)の日常的な着用が大学内の景観と授業態度に与える影響について、定量的に明らかにするため、運動着での登校が学内の景観イメージにネガティブな影響を及ぼす、運動着での登校が授業態度にネガティブな影響を及ぼす、という二つの仮説を措定し、筑波大学の学生を対象としたアンケート調査により検証した。その結果、運動着での登校は、大学内の景観イメージに「似合わない」とネガティブな影響を及ぼすこと、ならびに運動着での登校は、遅刻や居眠りをする度合いが増加するなど、授業態度にネガティブな影響を及ぼすことが明らかとなった。他にも、大学に公共交通で通っている人の方が、そうで無い人と比べ運動着登校経験が少ないこと、運動着登校経験がある人の方が運動着登校に関してポジティブな意見を形成していることが示された。

Key Words : *student's clothes, spoil the sight of university, attitude toward schoolwork,*

1. はじめに

「服装の乱れは心の乱れ」という標語は、1980年代頃より主に学校教育現場の生徒指導の際などに用いられてきた。「心の乱れ」は、授業をはじめとする学業に取り組む姿勢の低下、生活の乱れなどを指していると考えられる。これは一般に、制服などドレスコードが定められた場での服装の乱れを指摘し改善するための標語であるが、実際にそのような因果・相関関係の存在有無については、直感的にはあり得ると感じられるものの、時と場合によっては定かではないと考えられる。

一方で、一人一人の服装が景観に及ぼす影響について、青木¹⁾や藤井²⁾の研究では、服装を含む個々人の振る舞いが都市景観の構成要素であることに言及している。我が国では、何らかのドレスコードが無い限り、服装の選択は個人に任されている。しかし、例えばオフィス街ではスーツにネクタイの人々が集う景観が似合うであろうし、結婚式ではフォーマルなスーツやドレス、登山道では登山に適した服装が似合うのである。つまり、コミュニケーションの手段として、社会的文脈に合致した服装の選択がよりよい景観を創り出すのではないかと考えられる。

このように服装は学業や生活態度など個人的な問題に影響するだけでなく、その場所の風景、景色にも何らかの影響を及ぼしている可能性があるが、未だ定量的には明らかになっていないのが現状である。そこで本研究では、明確なドレスコードが無く服装の自由度が高いものの、本来的には学業の場である大学を対象として、大学生の通学時の服装が学内の景観と授業態度に与える影響について、筑波大学の学生を対象としたアンケート調査により定量的に把握することを目的とする。

2. 既往研究と仮説

本章では、服装、被服と景観に関する既往研究の概要と本研究の仮説を述べる。

(1) 被服に関する既往研究

被服行動に関する研究は、主に家政学、生活科学、被服心理学、社会学などの分野に多く見られる(例えば文献4)–12))。

福岡ら¹¹⁾は、さまざまな社会的場面における着装意識度の評定から着装基準の構造化を試み、インフォーマル、

フォーマル、セミフォーマルの3因子を抽出し、「学校へ通学する」場面はインフォーマルな場面であると定義している。さらに着基準の重視度を場面別に分散分析し、インフォーマルな場面で服装を意識する人ほど、人目を引き、自分を引き立て自己表現できるといった「個性・流行」の基準を重視していると述べている。

また、藤木¹²⁾は、通学途中や学内にいる場面は決してプライベートな場面ではなく、少なくとも社会もしくはその組織を構成する一員としてのパブリックな要素を否定することはできないと指摘している。また、他者との関係において、服装はコミュニケーションの手段としての役割を有するため、T.P.O.をわきまえ、他者に配慮することで、よりよい関係を構築することができることも述べている。このような問題意識から、女子短大生の服装に関する意識調査として、通学時の服装にふさわしいものがあるかないかを問うたところ、「ある」と「ない」の比率はおよそ2:3であった。このうち「ある」と答えた学生は「大学に勉強に来ている」という目的やT.P.O.を認識し、服装を他者とのコミュニケーション手段ととらえていること、「ない」と答えた学生は自己の快適性・満足感を中心に服装を選択していることを報告している。

(2) 景観に関する既往研究

服装が都市景観に及ぼす影響について言及している研究として、青木¹⁾は、景観イメージを構成するものとして、建物や木々など自然などのいわゆる景観に加え、そこにいる人々の服装も関係する、と述べている。景観に加わる人間がその景観に似合っているならば、景観の印象はその前後で不変に保たれるというのである。

藤井²³⁾は、「行動」の景観に対する本質的影響は、純粋な自然景観を除く全ての景観において存在しうるとし、一人一人の行動変容が景観変容を導く根源的契機であると論じている。また、都市景観に対する議論において、街や地域、そして国土を今よりも「美しい」ものとするために求められるのは、そこに住まう人々の暮らしぶりを美しく「行動変容」することであると述べている。この論理に当てはめれば、一人一人が整った服装をする方向に行動変容するなら、その都市の街路景観も美しく整ったものになる可能性を秘めていると言えよう。

(3) 本研究の仮説

以上の既往研究より、被服行動が、T.P.O.をわきまえるなどの生活態度と関連を持つこと、ならびに服装が景観に影響を及ぼすことが示された。

本研究では、これらをふまえ、大学生の被服行動の表れである服装のうち、運動目的以外の日常的な運動着(ジャージ・スウェット)に着目することとした。運動着は体育の授業や運動系の部活に着用するためのものであ

るが、動きやすく着脱しやすいこと、運動着を部屋着やパジャマにしている場合就寝時と同じ服装で外出できることなど、個人的なメリットは大きいと考えられる。しかしながら、「運動着での登校はだらしがない」「風紀が乱れる」「大学イメージが低下する」など、大学としての社会的なデメリットも存在する可能性があり、社会的ジレンマの構造が潜んでいる可能性もある¹³⁾。

そこで本研究では、運動着の日常的な着用が大学内の景観と授業態度に与える影響について、定量的に明らかにするため、以下の二つの仮説を指定し、検証することとした。

仮説1) 運動着(ジャージ・スウェット)での登校は、大学内の景観イメージにネガティブな影響を及ぼす。

仮説2) 運動着(ジャージ・スウェット)での登校は、授業態度にネガティブな影響を及ぼす。

3. 調査概要

本章では、研究対象とした筑波大学の概要を述べるとともに、調査の方法と調査項目について詳述する。

(1) 筑波大学の概要と学生の服装の現況

筑波大学は茨城県南部の筑波研究学園都市に位置し、学生約12,000人、教職員約6,000人の総合大学である。新入生の多くは大学敷地内にある学生寮に居住し、2年生以上の学生も多くは大学周辺のアパートに居住しており、自転車で通学する学生が7~8割となっている。2005年のつくばエクスプレス開通以降、首都圏から自宅通学する学生も徐々に増えており、公共交通での通学者も増加しつつある。

大学周辺に居住する学生の中には、体育の授業が無い日でも運動着(ジャージやスウェット)で登校する人もいる。大学本部としては服装は個人の自由に任せるとの方針で、特に大きな問題とは認識していない状況にある。

筑波大学のもう一つの特徴は、体育専門学群という体育・スポーツ・健康に関する最新の科学を扱う学部があることである。オリンピック出場やプロサッカー選手をめざす一流選手を有していることでも知られ、日常的に運動着を着用する学生も多い。

ここで、筑波大学の学生は、スーツや運動着以外の服装のことを「私服」と呼んでいる。本来はスーツや運動着も私服に含まれるものの、適切な言葉が見あたらなかったため、本研究ではスーツや運動着以外の服装を「私服」と呼称する。

(2) 調査の方法

調査は、筑波大学で開講される講義の担当教員に依頼し、授業後の休み時間に直接配布・回収して実施した。また、筑波大学との比較対象として、東京大学、大阪大学、国士舘大学に所属する教員にアンケート調査への協力を依頼し、それぞれの大学の授業時に配布・回収してもらった(東大37名、阪大85名、国士舘大38名)。筑波大学における配布数は表-1の通りである。

なお、総合科目は、大学内の全ての学部が受講できる科目であり、所属学部の偏りを無くすために選定した講義である。体育専門学群は、本研究では運動着という服装に着目したことから、特殊な事情をもつこの学部のサンプルを多めに取得する必要があると考えたため、三つの講義を選定した。

表-1 筑波大学における配布講義とサンプル数

開設区分	授業名	サンプル数
総合科目	知的財産のしくみ	87
総合科目	キャリアデザインⅣ	127
社会工学類開設	国際金融論	78
体育専門学群開設	身体教育の社会学	43
体育専門学群開設	専門語学	21
体育専門学群開設	生理学	173
計		529

*景観写真に関するイメージ調査です。それぞれの写真を見ての印象に該当するところにチェックをつけてください。

(1) 

(2) 

(3) 

好き 嫌い

開放的 閉鎖的

柔らかな 硬い

庶民的な 高級な

地味な 派手な

雑然とした 整然とした

たくましい 繊細な

にぎやかな 静かな

楽しい つまらない

華やか 洗い

男が多そう 女が多そう

体育会系 文化系

明るい 暗い

田舎 都会

革新的 伝統的

おしゃれ ださい

高偏差値 低偏差値

好き 嫌い

開放的 閉鎖的

柔らかな 硬い

庶民的な 高級な

地味な 派手な

雑然とした 整然とした

たくましい 繊細な

にぎやかな 静かな

楽しい つまらない

華やか 洗い

男が多そう 女が多そう

体育会系 文化系

明るい 暗い

田舎 都会

革新的 伝統的

おしゃれ ださい

高偏差値 低偏差値

背景と人の服装が
似合っている 似合っていない

好き 嫌い

開放的 閉鎖的

柔らかな 硬い

庶民的な 高級な

地味な 派手な

雑然とした 整然とした

たくましい 繊細な

にぎやかな 静かな

楽しい つまらない

華やか 洗い

男が多そう 女が多そう

体育会系 文化系

明るい 暗い

田舎 都会

革新的 伝統的

おしゃれ ださい

高偏差値 低偏差値

背景と人の服装が
似合っている 似合っていない

図-1 景観写真へのイメージ評価 調査票例 (A. 大学の建物(屋外))



図-2 景観写真へのイメージ評価に用いた写真 (B. 教室の中))

(3) 調査項目

アンケートの調査項目のうち、本研究で使用する尺度とその両端の定義を表-2に示す。

表-2 調査項目と尺度

- 個人属性：性別、学年、所属学部、通学の交通手段、居住形態(実家、寮、アパートなど)
- 景観写真へのイメージ評価：人物なし、運動着、私服の各々の写真の評価を図-1に示す項目と尺度両端の定義について、5件法で評価を要請。
- 授業態度：授業に出る気がしないことがある。／朝寝坊などで授業に遅れることがある。／なんとなく授業をサボることがある。／大学からの連絡事項を見落としてしまうことがある。／授業の課題が遅れたり、出さなかったりすることがある。／授業中に居眠りをしてしまうことがある。(全く当てはまらない～とても当てはまる、の5件法)
- 運動着での登校経験：ジャージ・スウェットで登校したことがありますか? (はい、いいえの2件法)
- 運動着での登校に対する意識：ジャージ・スウェット登校に賛成である。／ジャージ・スウェットの多い大学のイメージが良い。／ジャージ・スウェット登校は大学生の服装としてふさわしいと思う。／ジャージ・スウェットが好きである。／ジャージ・スウェットはカッコいいと思う。／ジャージ・スウェットを着ている人に恋をする。／ジャージ・スウェットによって風紀が乱れると思う。／ジャージ・スウェット登校はだらしがないと思う。／これからジャージ・スウェット登校を続けようと思う。(全く当てはまらない～とても当てはまる、の5件法)

景観写真へのイメージ評価については、青木ら¹⁾のアプローチを参考に、A. 大学の建物(屋外)(図-1)と、B. 教室の中(図-2)の二つの場面において、(i)人物無し、(ii)私服の人物4名、(iii)運動着の人物4名、の三種類の写真を提示し、図-1に示す景観評価の項目を問うた。青木らの研究では、(i)人物無しの景観評価を基準とし、(ii)(iii)の人物が写った写真の景観評価との差異が少ないほど、人物が背景に「似合っている」と評価している。本研究においても、同様の評価を行うこととした。

4. 分析結果

(1) 服装と景観に関する分析結果

図-3は、場面毎に私服とジャージのどちらが背景の景観写真と似合っているかを5件法で問うた質問の平均値である。屋外、屋内ともに、運動着の方が「似合っていない」と評価されていることが示された。

図-4、図-5は、それぞれA. 大学の建物(屋外)の景観写真へのイメージ評価、B. 教室の中の景観写真へのイメージ評価の平均値と、人物無しの写真の平均との差をグラフ化したものである。線の絶対値が大きいほど、人物無しの写真との乖離が大きいことを示しており、「景観に似合っていない」と評価されたと見なしている¹⁾。図-4、図-5よりどちらも服装がジャージであったほうが絶対値が大きいほか、ジャージ・私服それぞれのスコアの絶対値の合計はAのジャージが3.34、私服が2.45、Bのジャージが3.08、私服が2.43といずれも私服の方が乖離が少なく、景観として評価が高いことが示された。

これらより、ジャージは私服に比べて大学内の景観にネガティブな影響を及ぼしていることが示され、仮説1が検証された。

(2) 服装と授業態度に関する分析結果

図-6は、運動着での登校(ジャージ登校)の経験有無別に授業態度のスコア(表-2参照)を比較したグラフである。「授業に出る気がしない」「授業をさぼる」行為についてジャージ登校経験がある人の方が有意に行う傾向が示された。また、遅刻、連絡事項を見落とす、授業中の居眠りについても、ジャージ登校経験がある人の方が、統計的に有意に高いことが示された。これより、仮説2が検証された。

なお、先に述べた体育学群については、授業カリキュラム上、日常的に運動着を着用する必要があることから、ジャージ登校経験が無い人が皆無であった。そこで、体育学群の特殊事情として、運動着登校が授業態度にそれほど影響しない可能性も考えられるため、体育学群とそれ以外の学群の「ジャージ登校経験あり」の学生間で授業

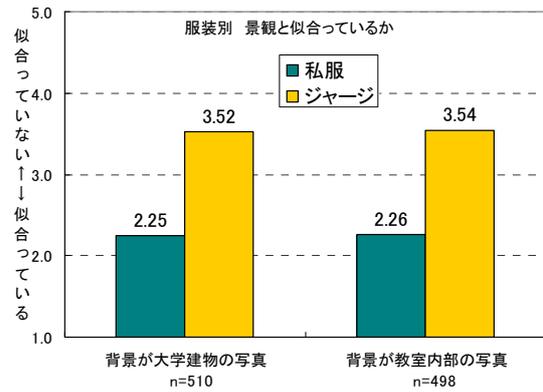


図-3 写真の人物の服装が景観写真に似合っているか

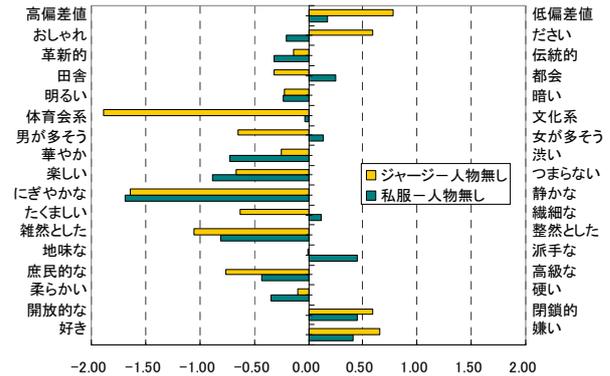


図-4 A. 大学の建物(屋外)景観写真へのイメージ評価

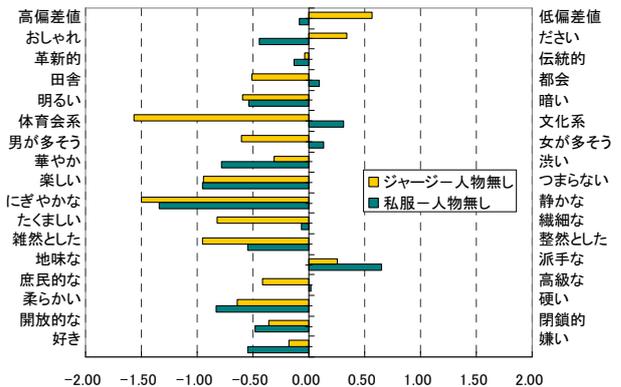


図-5 B. 教室の中 景観写真へのイメージ評価

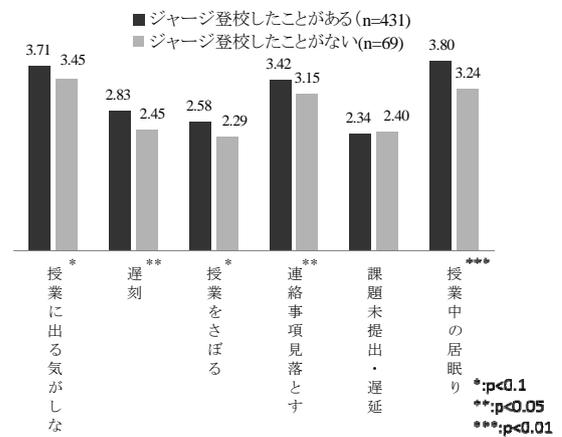


図-6 B. 教室の中 景観写真へのイメージ評価

表-3 体育専門学群とそれ以外別 ジャージ登校経験ある人の授業態度

	「ジャージ登校の経験ある」と回答した人						平均値の差のt検定	
	体育専門学群			体育専門学群 以外			t	p
	n	M	SD	n	M	SD		
授業に出る気がしないことがある。	238	3.63	1.25	210	3.80	1.15	-1.485	.069
朝寝坊などで授業に遅れることがある。	238	2.62	1.40	210	3.03	1.58	-2.900	.002
なんとなく授業をサボることがある。	238	2.54	1.39	210	2.66	1.59	-.847	.199
大学からの連絡事項を見落としてしまうことがある。	238	3.30	1.14	210	3.57	1.20	-2.449	.075
授業の課題が遅れたり、出さなかったりすることがある。	238	2.25	1.20	210	2.53	1.48	-2.236	.013
授業中に居眠りをしてしまうことがある。	238	3.86	1.17	210	3.72	1.21	1.271	.102

n: サンプル数, M: 平均, SD: 標準偏差, p: 有意確率(片側)

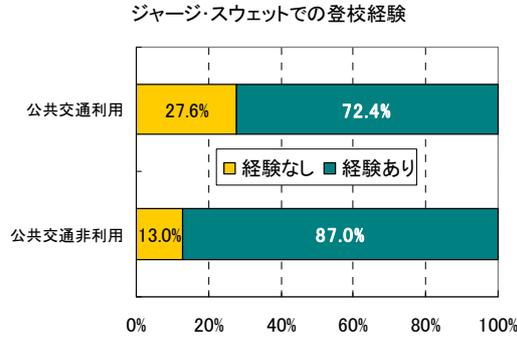


図-7 筑波大学における服装と通学手段

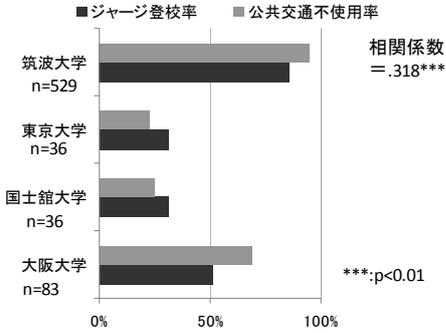


図-8 四大学における運動着登校率と公共交通不使用率

表-4 運動着での登校経験 有無別 運動着登校への意識 平均値の差のt検定結果

	ジャージ登校 経験あり			ジャージ登校 経験無し			平均値の差のt検定(片側)	
	n	M	SD	n	M	SD	t	p
ジャージ・スウェット登校に賛成である。	407	3.55	1.24	64	3.22	3.95	1.34	.090*
ジャージ・スウェットの多い大学のイメージが良い。	408	2.72	1.08	64	2.19	0.94	3.73	.000***
ジャージ・スウェット登校は大学生の服装としてふさわしいと思う。	408	2.80	1.17	64	2.41	1.14	2.53	.006***
ジャージ・スウェットが好きである。	407	3.55	1.19	64	2.89	1.35	4.06	.000***
ジャージ・スウェットはカッコいいと思う。	406	2.99	2.24	64	2.44	1.18	1.94	.027**
ジャージ・スウェットを着ている人に恋をする。	405	2.40	1.15	64	2.02	1.06	2.55	.006***
ジャージ・スウェットによって風紀が乱れると思う。	406	2.31	1.12	64	2.52	1.21	-1.36	.087*
ジャージ・スウェット登校はだらしないと思う。	407	2.55	1.17	64	2.84	1.21	-1.89	.030**
これからジャージ・スウェット登校を続けようと思う。	407	3.40	1.33	64	1.83	1.12	8.98	.000***

n: サンプル数, M: 平均, SD: 標準偏差, p: 有意確率(片側)

態度の平均値の差のt検定を行った結果を表-3に示す。これより、「授業中の居眠り」以外の授業態度については、体育学群の方がその他の学群よりも良いことが示された。具体的には、体育学群は「授業に出る気がしない」「大学からの連絡事項を見落とす」は有意に低い傾向にあり、「遅刻」「課題未提出・遅延」の項目では統計的有意に低い、つまり授業態度がよいことが示された。よって、仮説2については、カリキュラム上運動着を着る必要のある体育学群にはそれほど当てはまらず、その他の学群についてより強い関係がある可能性が示唆されたとと言える。

(3) 服装と交通手段、運動着登校への評価

次に、筑波大学における運動着登校経験の有無別の通学交通手段の割合を図-7に示す。これより、大学に公共交通で通っている人は、そうで無い人に比べ運動着登校経験が少ないことが示された。これは、不特定多数の人が利用する公共交通はパブリックな場所と認識し、TPOをわきまえ、他者に配慮する傾向があることを示している可能性がある。

同様に、調査にご協力くださった四つの大学の運動着登校経験率と、公共交通不使用率を見ると(図-8)、正の

有意な相関が見られた。これらより、服装と交通手段にも密接な関係があることが示された。

表-4は運動着での登校経験有無別の運動着登校への意識を示したものである。平均値の差のt検定を行ったところ、運動着での登校経験がある人は、経験が無い人に比べ、全ての項目において運動着での登校をポジティブに捉えていることが示された。

5. おわりに

(1) 本研究の成果

本研究では、運動着の日常的な着用が大学内の景観と授業態度に与える影響について、定量的に明らかにするため、二つの仮説を掲げ、検証した。

その結果、運動着(ジャージ・スウェット)での登校は、大学内の景観イメージにネガティブな影響を及ぼすこと、ならびに運動着(ジャージ・スウェット)での登校は、授業態度にネガティブな影響を及ぼすことが明らかとなった。ただし、運動着と授業態度の関係については因果関係であるとは言い切れず、例えば「だらけ」など本研究で

は観測していない他の要因に起因する可能性もあると考えられる。

他にも、大学に公共交通で通っている人の方が、そうで無い人と比べ運動着登校経験が少ないこと、運動着登校経験がある人の方が運動着登校に関してポジティブな意見を形成していることが示された。

(2) 今後の課題

本研究では、服装と景観、授業態度の關係に着目して分析を行った。今後は、これらの知見を活かしたコミュニケーション・ツールを作成し、大学生の安易な運動着登校への意識の向上を図っていく試みが必要であると考えられる。

また、本研究では大学という限定された空間における学生の服装を対象としたが、一般的な都市景観においても同様に、個々人の服装が景観や生活態度に影響を及ぼすことが予想される。今後、中心市街地や公共交通の中といった公共空間においても、服装の影響を把握していきたいと考える。

謝辞 東京大学の森宣暁先生、大阪大学の松村暢彦先生、国士舘大学の寺内義典先生には、ご所属の大学の学生を対象としたアンケート調査に快くご協力いただきました。ここに記して謝意を表します。

謝辞 本研究は、平成24年度筑波大学社会工学類の都市計画実習の成果の一部をまとめたものである。この実習に関わった先生方、技官の方々、関係者の方々に謝意を表します。

参考文献

1) 青木義次, 岡田篤生, 尚炯鍾: 都市空間における人と景観の相互作用学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築

- 経済・住宅問題, 建築歴史・意匠, pp.53-54, 1988.
- 2) 藤井聡: 態度・行動変容施策に基づく景観改善, 景観・デザイン研究講演集, CD-ROM, No.3, 2007.
 - 3) 藤井聡: 風格ある景観と「行動変容」—風景の望む心のあり方 (田中尚人, 柴田久, 藤井聡, 秀島栄三, 横松宗太: 土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント, 第一章, 2007)
 - 4) 神山進, 高木修: 被服行動の社会心理学—装う人間のこころと行動 (シリーズ 21 世紀の社会心理学), 北大路書房, 1999.
 - 5) 富田弘美: 女子学生の服装意識と性格との関連性, 東京家政学院大学紀要. 人文・社会科学系 42, pp117-122, 2002.
 - 6) 扇澤美千子, 皆川温実, 川端博子: 女子高校生の服装意識から考察する服装学習の方向性, 茨城キリスト教大学紀要. II, 社会・自然科学 45, pp187-197, 2011.
 - 7) 野津哲子: 島根女子短期大学生の衣生活の実態について, 島根女子短期大学紀要 22, pp21-31, 1984.
 - 8) 海道貴子, 服部由美子: 福井市およびその周辺に在住する大学生の着装行動, 福井大学地域環境研究教育センター研究紀要: 日本海地域の自然と環境 (12), pp33-42, 2005.
 - 9) 藤井一枝: 男子・女子大学生のファッションに対する関心度と行動, 島根女子短期大学紀要 28, pp119-128, 1990.
 - 10) 渡辺明日香: ストリートファッションにおけるエリアと服装色の関連性: 原宿・渋谷・銀座のフィールド調査から (<特集>街角ファッションと色彩観測), 日本色彩学会誌 27(4), pp335-339, 2003.
 - 11) 福岡欽治, 高木修, 神山進, 牛田聡子, 阿部久美子: 着装規範に関する研究(第1報) —生活場面と着装基準の関連性, 繊維消費科学誌 vol.39, pp-702-708, 1998.
 - 12) 藤木悦子: 女子短大生の服装に関する意識, 福岡女子短大紀要 59, pp85-95, 2001.
 - 13) 藤井聡: 社会的ジレンマの処方箋, ナカニシヤ出版, 2003

(2012. 8. 3 受付)

A STUDY ON EFFECTS OF STUDENT'S CLOTHES ON THE SIGHT OF UNIVERSITY AND ATTITUDE TOWARD SCHOOLWORKS - CASE OF UNIVERSITY OF TSUKUBA -

Ayako TANIGUCHI, Kunio AKAZAWA, Yukie OKAMOTO, Kousuke KIRIYAMA
and Momo SATOU